



オーク出産祭

出産経験数
3人

出産経験数
1人

アタイ聞いてない
帰っていいかな...

出産経験数
1人

ウン!

こんな大勢の前で
するの!?

これまで
色々あったけど
一番恥ずかしい

諦めた方がいいわ
言っただけ聞かない奴ら
じゃないから

うええ...

オマエラ
出産祭が
ハジマるゾ!

バカ
そんなすぐ
出てくるわけ





お母さんが
守ってあげるから

怖がらず
早く出て
おいて

みんなの前で
この子の
ママになるの？

…アタイ

ウソ！
ホントに産まれる
！？

ゴポポ

ビチャビチャ♡

ビヤッ♡

破水力？

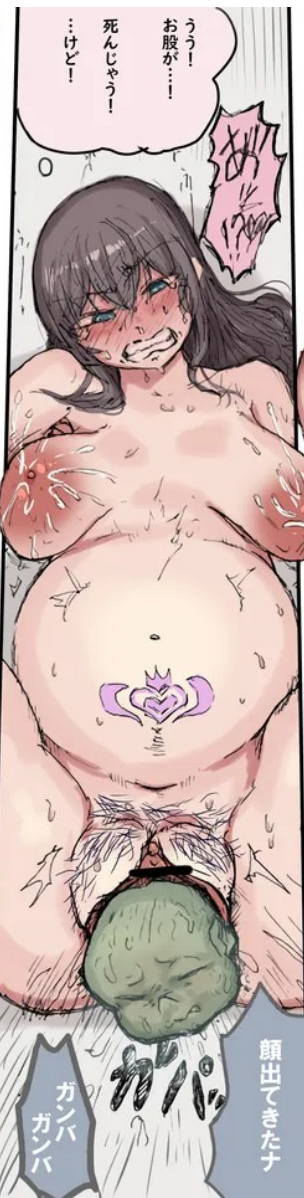


だめっ
幸せ過ぎて！

誰にも！
見せられない
顔してる！

あと少し

オ！



ううう！
お股が…！
死んじゃう！
…けど！

顔出てきたナ

ガンバ
ガンバ

かぱ



産まれる！

イキ過ぎて
母乳出てるン

頭！



ゴッゴッゴッゴッ

オッ！
ナンダ？

潮を吹いたナ

雌になつてモ
我らの子供を出産するのニ
人間は耐えられヌ
出産時はごつやッテ
雌の印が
快樂も与えてるのダ

もつとモ
死ぬ程辛い事ハ
変わらんがナ

ソロソロ出てくるン





我々の繫栄を祝おう!

オメデトウ!

メデタイ

うっ
おっかん♡

うっ
おっかん♡

おっかん♡

104

パチ

104

104

104

104



めでたい！
今夜は飲み明かそう！

我らオーク族の
繁栄を祝おうぞ！

これからもボク達を
いっぱい孕ませてね♡

オーク様♡



オーク出産祭2



オーク出産祭2

オークの祭りが始まる。
その名は「出産祭」



雌たちがオークの前で出産する祭り。



選ばれた雌たちは祭りの準備をしていた…





うう、恥ずかしい

いつも通り
やれば大丈夫だから

あいつ
さっさと帰るわ

うわ、凄いぞ！
不安だわ

ドキ
ドキ

ドキ

ドキ

ガヤ

ガヤ

ガヤ

ガヤ

宴が始まるぞ！！



ずる...♡

みんなの前へ
お尻を向けて...

...アソコを見せつける

うう...
こんなに大人数に
見られるなんて

エロい離の臭いだ

穴の奥まで
良く見えるぞ

良く実った尻だ
孕ませてえ

モ

ワ

ア

♡



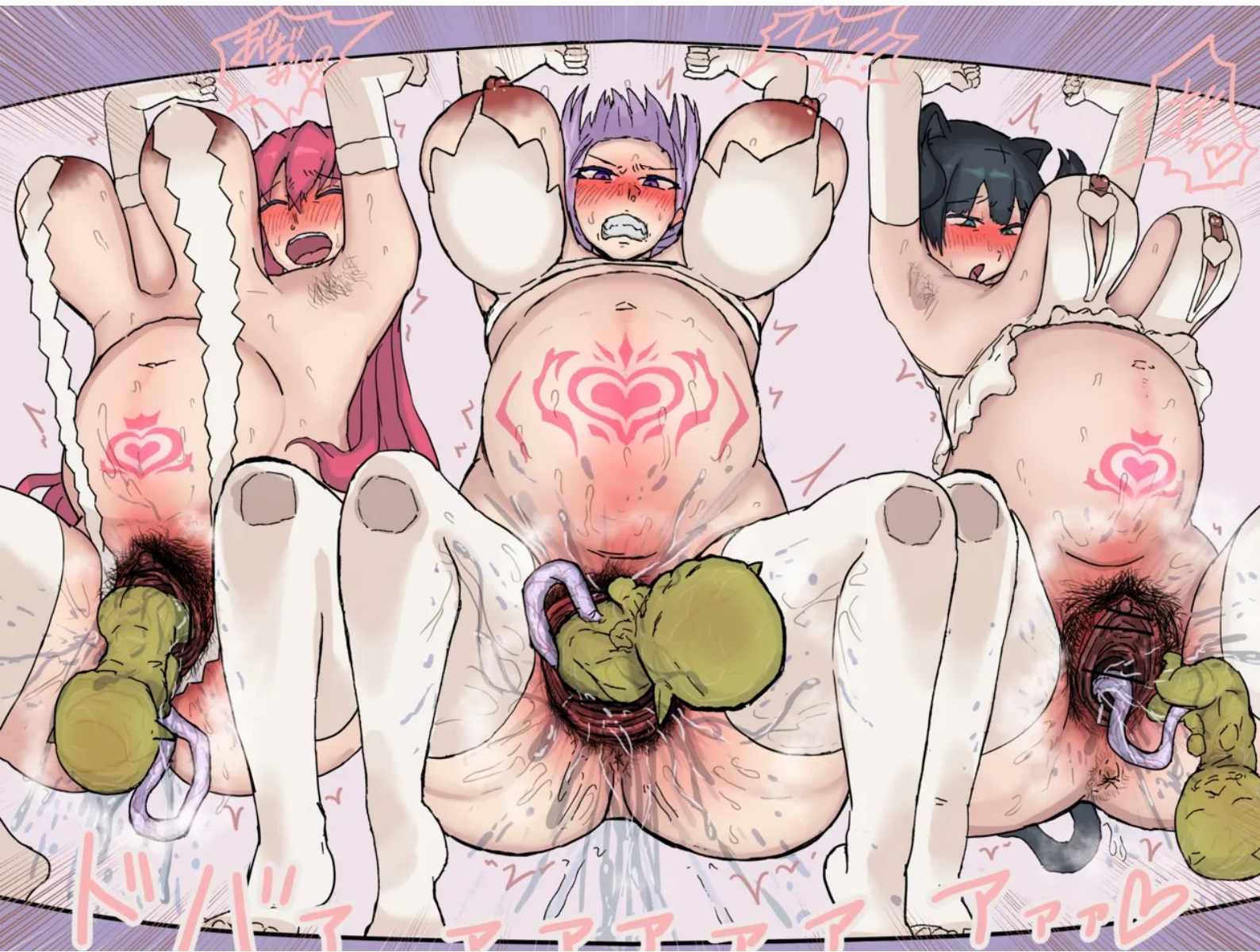


お腹で
暴れてる!

赤ちゃんが
出ようとしている!!

母乳が!
なんで!?!







オーク出産祭3

3人の雌がステージの上に立つ。
その周りをオーク達が囲っていた。

アロマ
「まさか、お二人と
一緒にいれるなんて
幸せです。」

カンナ
「そんな事言うなよ、
雌はみんな平等だろ？」

マハリタ
「そりゃ、だから敬語はなしよ。」

騎士団の副隊長と
有名な踊り子だった
二人がそう言った。

「そ、そうね。
ならはじめるよ、
オーク様。
私たちが未来の戦士達を
産む姿を見てください。」

こうして祭りが始まった。



（あの人も見てるから、私頑張ってオーク様たちに貢献しないと！）

「~~~~~」

彼女は出産の痛みを耐えていた。

大人しそうな顔から想像できない程、苦悶の表情をした。



「ご覧ください、オーク様！」

はあ♡

はあ♡

はま♡

苦しみと快楽の
混じった声でそう言った。
股を開き踊る彼女の股間に
緑の頭が覗かせていた。

「はあ、はあ、産まれちゃーうー？
みんなに見られながら赤ちゃん産んじやうー！」

ふるん

ふるん

じゅわん

じゅわん



「産まれる！」

じゅぶじゅぶと卑猥な音を立てた。
オークの赤ちゃんを出産した。
出産の苦しみから解放され、
荒い呼吸をする彼女。

「はあ、はあ、はあ」

はあ

はあ

はあ

はあ

ぐじゅ

おぎんち

おぎんち

何度産んでもこの痛みはなれないなあ……
やり遂げた母親の顔であった。





彼女達は未来の戦士の命を生んだのだ。



こじ開けられた性器から伸びる
へその緒は彼女達が
この子の母親である事の確かな証拠だ。



3人はオークの子を出産した。

オーク達は彼女達に拍手を送り、
祭りは盛り上がった。

騎士団の副隊長
ただのシスター
有名な踊り子で裏組織の一味

3人が同じ舞台に立つ事など本来あり得なかった。
しかし、雌となった今は過去の地位など関係なかった。

オークにとって新しい生命を生み出す雌は
等しく素晴らしいのだった。

彼女達は雌の幸せに浸りながら
これからも産み続けるだろう...





「なんでもオレたちが
皆の前で赤ちゃんを
産まなうと誓ったんだよー」

「はな、
でもオク様が
求めるなら……」

「はな、
おんなじようにおんなじだよー」

「誰としたいの務めを
果たさなきゃだよー」

いくら時間が経ち、
大胆に広げた肉の洞窟の
奥から緑色の球体が顔を覗かせた。

「頭が出て来たぞ！」

（死ぬほど痛てえ！
でも！オレが産まねえと……！
オレがアイツの為にできる一番大切な事なんだから……！）

「うるせえ！ちよつとは静かにしてろー！
男勝りな性格は雌に堕ちても健在。」

傷が原因で婚約者から
逃げられた過去を持つ彼女。
結婚に憧れていたからこそ、
男を恨み、騎士としてひとり
選んだはずだった。
そんな彼女が今では淫乱な肉体を持つ雌に変えられ、
大勢のオークに見られながら出産していた。



『~~~~~』
大きな悲鳴が会場内に響いた。

おおおお

『~~~~~』
痛~~~~~
しんじゅうよおお~~~~~』

頭が見えたぞ！
ほら、頑張れ！

ビクッ

（オーク様の声が聞こえる……
頑張らなにと……）

ビクッ

チリチリ

ビクッ

ビクッ

自由気ままな人生を送っていた彼女。
しかし、今では運命の人に巡り合い、
自分にしかできない大業を務めていた。
大勢の雄の前にさらけ出した秘部からは
赤ちゃんの顔が出た。



「あああああああ……」
「みて！みて！」
ソユル赤ちゃん産んでるよー！！

苦悶に満ちた顔で腰を振りながら
赤ちゃんを産んでいた。
その姿にオークたちも声を上げた。

ぐ
ほ
ほ

あ♡

あ♡

不安に満ちた騎士の時代からは想像が
付かない程、彼女は雌になっ
てしまっていた。
オークに愛されている安心と信頼から、
彼女は淫らな姿を晒していた。

グ
ン
ン♡

「もっとらっぱらソユルが
赤ちゃんを産むところ見て♡」

グ
ン
ン♡



「ほら♡
もうこんなに赤ちゃん出てきますよ♡」

ビュッ♡

ブル♡

彼女の忠義は本物で今では心の底から主人のオークを愛し、
彼に身を捧げる事を考えている。
雌として出産祭で赤ちゃんを産む事が彼女の重要な務めなのだ。
そして、その時が来た。

彼女は痛みを見せず腰を振り赤ちゃんを揺らしていた。

彼女の一族は代々、領主を守る付き人を行っていた。
なので、小さい頃から、主人に尽くすための礼儀を教わっていた。
その教育がオークに対して向けられることになるとは
誰も想像していなかっただろう。

ビュッ

ビュッ

ブッ♡

「出ちゃいますよー！♡
赤ちゃん産まれますよー！」

♡



「~~~~~」



「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」

「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」

「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」

「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」

「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」

「おっぱい、おいしいわね。ママの乳は、ほんとにいい匂いするわね。」



出産祭
それはオークの進軍を祝う祭り。



様々な肌の色の雌達が
観客たちを興奮させた。





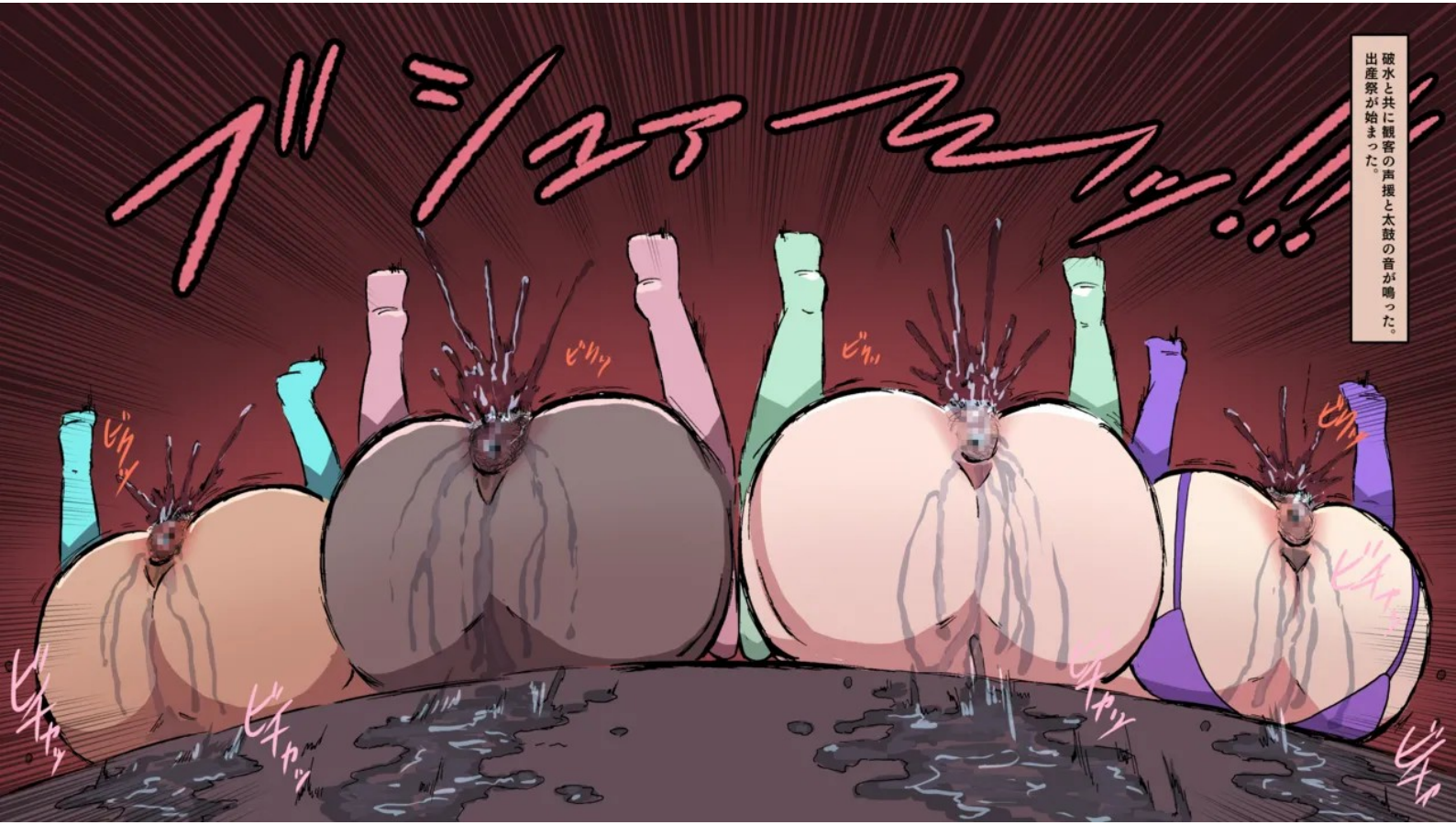
これから
赤ちゃんを
産みます♡

皆さん
見て下さい♡

数ヶ月前までは未使用で美しかった性器は
オーグとの交尾で卑猥な形をしていた。

ムワァッ...♡

破水と共に顧客の声援と太鼓の音が鳴った。
出産祭が始まった。





立派な戦士
を産んだ！

がんばれ！

頭が見えてきたぞ！

グッパッ

グッ

グッグッ

グッ



産まれるぞ!!

もうすぐ産まれるツ!



今後も多くの女騎士が捕まり、離に交えられていくだろう。
そしてその身体はオークのため使われていくのだった。

オーラ
ほんまに...♡

よくやった!!

こうして祭りは続いていくのだった。

新たな戦士の
誕生を祝い乾杯!!



魔界探索騎士隊は帰って来なかった



そこには3人の女性がいた。

「ちょっとーオリビアさんに近よりすぎじゃない??」

「いいんだよ、ボクとオリビアの仲だから」

「こちら喧嘩しないの。オーク様達の前なんだから。」

膨らんだお腹から彼女たちが妊婦なことは明らかだ。

そしてここは魔界にあるオークの国。

彼女たちはオークの雌で

そのお腹にはオークの赤ちやんがいる。



彼女たちは誇り高き騎士であった。

しかしそれは人間の世界にいた時の話。

彼女たちの思考は今やオークの文化に染まっていた。

真ん中の女性がうっとりとした瞳で言った。

「オーク様。私たちが赤ちやんを産むところよく見てくださいね」

「~~~~~っ!!」
声にならない悲鳴が何時間も続いていた。
最初は余裕あったが今ではただひたすら痛みを耐えていた。
オークの赤ちゃんを産むのに人間の身体は適していない。
この数か月間に彼女たちの体はオークの雌に相応しい身体に
改造されていた。しかし、それでも苦痛を味わう。

そして苦痛を中和させるように「雌の印」が快楽を与える。
これまで感じたことのない痛みと快感で彼女たちは
嗚咽のような、悲鳴のような何かを上げ続けていた。
彼女たちの股間から緑色の頭が見えてきた。
そろそろ産まれる様だ。



「あああああああああああ！！！！！！！！！」

3人が同時に声をあげ
股の間から液体と緑の物体を吐き出した。



「ああ、みて……！
あなたと私の赤ちゃん……！
私幸せ……！」

「この子は天才になるよ、
なんたって
ボクの赤ちゃんなんだから」

「私に雌の喜びを
教えて下さり
有難うございます……！」



彼女たちは間違いない騎士であった

才能で選ばれ
忠義で選ばれ
熱意で選ばれ

努力をし、才能を持ち、誇りを胸に抱き
魔物から民を守るため魔界へ向かったはずだった。

しかし、そこに騎士の面影はなく
慈愛に満ちた眼差して産まれたばかりの
わが子を見つめる母の姿だった。

彼女はこれからの人生全てをオークに愛され、
赤ちゃんを産み、育てる事になる。
騎士とは無縁の、雌の人生。

彼女たちの
騎士としての人生は
全て無駄だったのだろうか……？

